



北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

「レモンの味を知らなくてもレモンの味 を創出できる方法論：完全解説」

written by 北岡 泰典

Third Version, September 2016

著作権：(株) オフィス北岡

<http://www.office-kitaoka.co.jp>

©2016 Taiten Kitaoka & Office Kitaoka, Inc. All rights reserved internationally

注意書き

1. 本書き下ろしエッセイの著作権は、北岡泰典と（株）オフィス北岡に属します。

本書の全体または一部を、明示的な書面での許可なしに電子的または機械的な手段を含むいかなる手段によって複製することも禁じられています。

2. 本エッセイについては、今後、北岡のサイト、メルマガ等経由で、限定公開する可能性があることを、予めご了承ください。

3. 北岡が独自開発した「現実という名のロールプレイングゲーム」のコンセプトについては、最近の『これが本物の NLP だ!』のメルマガの新編第 50 号以降（特に、新編第 53 号）を参照されるようにお勧めします。

4. 北岡は、本エッセイの内容は、戦後 70 年の GHQ による「洗脳催眠」状態から日本人を覚醒させうる「とんでもない」奥義的ノウハウを含んでいると信じています。北岡は、「性善説」に基づいて、この情報を開示させていただきます。

目次

	ページ数
前書き	3
① 「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」 具体名開示	4
② 「ザ プロセス」 概要解説	10
③ 「ザ プロセス」 背景説明	15
④ NLP と「ザ プロセス」の完全止揚統合	22

謝罪訂正

本エッセイの中で、私は、『「ザ・マネーゲーム」から脱出する法』の著者名を、翻訳者の本田健氏が「シャインフェルド」と誤訳していて、本来的は、ドイツ語読みの「シャインフェルト」ではないか、と主張させていただいています。

ただ、最近 (2016 年 8 月)、私の知り合いで著者に近い方に、苗字の発音について、ご本人に問い合わせてもらったのですが、「英語読みで『シャインフェルド』だそうです。ドイツ語読みは、彼は知らないとのことです。先祖はドイツから来たのかもしれませんが、アメリカ人として生きることから英語読みにしたのでしょね」ということでした。

私は、1 年以上倍速で聴き続けている、オーディオブックの発音が「シャインフェルト」になっていると「思い込んで」いましたが、改めて確かめてみたら、聞こえ方がかなり微妙な箇所もありますが、たしかに「シャインフェルト」と聞こえます。

この件につきましては、私は全面的に「訂正謝罪」させていただきたいと思います。

翻訳者の本田健氏も、もしかしたら、ご本人に確かめた後、「シャインフェルド」にされたのではないかと現在思っています。

この点につきましても、クローズドの紙面上ですが、本田氏に深く謝罪いたします。

さらに、上記の私の知人からは、「シャインフェルドは現在、ザ プロセスを否定しています。現在の彼のステージでは、これまでの彼のワークの全てを否定していますね」という、実に極めて興味深いコメントをいただきました。

私は、今後、この件について、検証をしていきますが、現時点での私の立場は、私自身は、ある意味、シャインフェルド氏の「ザ プロセス」のアファメーションを、量子力学のモデルに合うように極力『脚色』、単純化して使ってきていて (私なりに、絶大と形容してもいいくらいの、かなりの効果を感じてきています)、また、同氏のモデルに基づいて、最近私は独自モデルを開発してきている、という意味において、私自身への「影響はミニマル」と、思える、というものです。

前書き

私は、『これが本物の NLP だ!』の新編第 44 号のメルマガ等で、「空恐ろしい」本に出会ったことを報告して、アフメーション (マントラ) だけで、どんどん「純粹意識」(神、空、ブラーマン、サムシンググレート、絶対意識、等の表現が可能です) に「戻る」ことができる、「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」(すなわち、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」) について語りました。

その後、実際の私の対面ワークと個人セッションでは、この書名と方法論の具体名を明かしてきていますが、メルマガ等では、いっさい具体名を言及してきていません。今後いつ公開するかは未定です。

本エッセイで、特別に、この書名と方法論の具体名を明かすことにいたします。

ちなみに、「現実という名のロール プレイング ゲーム」ワークを独自開発した後、私は、この「神の体験を創出できる認知論的な方法論」と「一度体験した神の状態を、いつでも自由自在に再現できる方法論」(すなわち NLP) の両輪を「完全統合」することに成功しました (!)。

私は、来年 1 月に還暦を迎えますが (たぶん、30 年以上 (魚は食べる) ベジタリアン生活をしてきているせいか、(内面はもちろんのことですが) 外観は 60 才には見えないですが (笑))、(元の意味合いは違うようですが) 「冥土に行くための俗世への置き土産」にしたいと思いたいほどの私自身の過去の集大成としてのノウハウが開示されるのが「現実という名のロール プレイング ゲーム」ワークとこのエッセイなので、本エッセイの価値は極めて高いと思っています。

要は、私の「現実という名のロール プレイング ゲーム」ワークに関する「奥義的必携書」的に位置づけられるものになるかと思えます (実は、この分野での本格的な「内的飛行士 (psychonaut)」としての私の研究はまだまだ始まったばかりなのですが (!)、もしかしたら、後世の方々に対する私の唯一の真の意味でオリジナルの「法定相続の遺産」くらいに位置づけてもいいのではないかと、とも、今、思っています)。

①「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる 方法論」具体名開示

私は、『これが本物の NLP だ!』のメルマガの新編第 44 号『北岡、「レモンの味を知らない」人がレモンの味を味わえる方法を発見!』で、「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」(すなわち、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」)について、語りました。

どのような経緯で、私がこの方法論を知るに至ったかは、本エッセイの目的上さほど重要ではないので、経緯については、メルマガ新編第 44 号、第 45 号等を参照していただくことにさせていただきたいですが、本紙面において、該当の方法論の完全情報を開示させていただきます。

(なお、新編第 44 号が発行された後、「事の重大性に気づいて」、私に直接メールで、書名等の具体名を教えていただけませんか、と連絡してきた方が二人いて(二人とも女性でした)、一人は私の過去のワークの参加者の方で、もう一人の方は米国在住の方ですが、せっかくのお問い合わせなので、このお二人には情報開示をさせていただきました。

個人的には、もっと多くの方々が同様の問い合わせをしてきてもいいのではとも思いましたが、本エッセイのテーマである「現実という名のロールプレイング ゲーム」(「現実のロールプレイング ゲーム化」、「現実の仮想現実化」はすべて同じ意味です。本エッセイでは、以下、「現実という名の RPG ゲーム」の表現に統一します)の観点から言うと、日本人の方々は「見る前に跳べ」(これは、私の座右の銘です)、「自分で一から考える」的な反応ができないのかと思われまます。

また、以前、Facebook で 108 個の「北岡語録」を投稿発信したとき、私は、まともな「哲学的」、「認識論的」議論を FB メンバーとしたいと思いましたが、私の記憶では、お二人の方を除いて、誰も反応しませんでした(というか、反応できなかったのでしょうか)。

このうちの一人は、私の長年の知り合いの英国人ですが、この方との英語での詳細な議論が Facebook 履歴にまだ残っているはずです。

日本人から来た反応といえば、上記の二人以外に、「名無しの権兵衛さん」が以下のメールを送ってきました(そのままの引用です)。

「『北岡語録』などと、わけのわからん事をやっておるが、そもそも全部がパクリじゃん。

お前自身のオリジナルなど何も無いくせに、人を誑かすようなマネはもういい加減止めなさい。

恥ずかしいという感情がお前には無いのか？」

「北岡語録」に関しては、引用と私のオリジナルの二種類（だいたい半々ずつでした）があり、その区別がわかるような形で語録を発信していたので、この指摘はまったくの的外れですが、なぜ名前も名乗れずに、「外野席の評論」しかできないのか、が本エッセイの最大トピックの一つでもあります。）

このような日本人のマインドセットを変えて、真の国際人になってほしいという思いで、私は、NLP を教えるために 2001 年に帰国した次第でした（この方法論を真に確立するまでに 14 年かかったという次第です）。

では、本題に入ります。

該当の「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」（すなわち、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」）を紹介した本は、

『「ザ・マネーゲーム」から脱出する法』
ロバート・シャインフェルド（著）、本田健（翻訳）

です。

（なお、このドイツ系米国人の著者の名前（「Scheinfeld」）は、「シャインフェルト」の方が正確な表記だと思います（私は、英語の『「ザ・マネーゲーム」から脱出する法』のオーディオブックをここ数ヶ月間毎日聞いてきていますが、そこでも、発音は「シャインフェルト」になっています）。）

メルマガにある「同じ著者のもう一冊の本」は、

『ビジネスゲームから自由になる法』
ロバート・シャインフェルド (著)、本田健 (翻訳)

です。

これらの本は、以下の理由から、

- 1) ざっと見ると、ごく普通の「当たるも八卦、外れるも八卦」のアフア
メーションの本のようにしか見えない
- 2) 著者の言うように、初めから順番に読み進まないと、まったく意味を
なさない
- 3) (メルマガで指摘したように) 翻訳書は、原書を正確に反映していない
- 4) 本田さんに対しては、好きな人も、嫌いな人もいる
- 5) 「マネーゲーム」、「ビジネスゲーム」の名前から、この本は「純粹
意識 (神)」のことを書いているとは思えない

といったいくつかの障壁 (スクリーン) を (わざと) 張っているので、こ
のとんでもない本の内容を理解できないレベルの人々には、そもそも真の
意味が汲み取れない「すばらしい」本です。

以下、各項目を詳しく説明させていただきます。

**【1】 ざっと見て、ごく普通の「当たるも八卦、外れるも八卦」のアフア
メーションの本のようにしか見えない】**

**【2】 著者の言うように、初めから順番に読み進まないと、まったく意味
をなさない】**

私が、この本を、個人セッションのクライアントに紹介したとき、数人の
方から異口同音に「実は、その本は以前に読んだことがあって、今も本棚

にあります。その本からは、北岡さんが言っているような意味合いは読み取れませんでした」的な反応をもらいました。

思うに、著者自身が本の中で何度も言っているように、この本のアフメーションを唱えるだけではまったく意味がなく、また、すべて初めから順に本をじっくり読んで、著者の前提を充分理解しなければ、まったくアフメーションは効果がないようにできています。

【3】 (メルマガで指摘したように) 翻訳書は、原書を正確に反映していない】

私は、個人的には、残念ながら、この翻訳書では、原書のすごさはそのまま通じない可能性がある、と考えています。

これについては、以下のことを指摘できます。

- i) 上記のように、著者名が誤表記です。
- ii) 翻訳の前文に「この本には美しいイラストがあります」の旨の文言がありますが、イラストが翻訳には見当たりません。
- iii) 肝心のアフメーション (マントラ) の訳の一部について、原書を読んでいないある人から不適切な感じがします、という指摘を受け、調べてみましたが、たしかに該当のセンテンスは「誤訳」と見なさざるえないものになっています。

それは、「surge」という言葉なのですが、翻訳では「(外側から) 押し寄せてくる」になっていますが、これは、文脈上、「(内側から) 湧き上がってくる」の意味であって、誤訳と言わざるをえません (誤訳の意味では、アフメーションが効かない可能性もあります)。

ちなみに、アフメーションを提示した著者本は、『マネーゲーム』、『ビジネスゲーム』の二冊ですが、内容はほぼ同じといいたいと思います。ただ、アフメーションは、『マネーゲーム』では、かなり冗長になっていて、『ビジネスゲーム』では簡潔化されているので、私は、アフメーション自体については『ビジネスゲーム』のバージョンを使うべきだと思います。

iv) 原書には、「米人のエグゼキュティブが日本に滞在していて、電車の棚に重要書類の鞆を忘れて、家に帰って鉄道会社に電話したら『見つかっていません』と言われたが、アフメーションを続けたら、会社から電話があって、『見つかった』という連絡を受けた」といったケーススタディが数多く紹介されていますが、私の理解では、翻訳では、削除されているようです。

このエグゼキュティブの話は、日本では当たり前なので（欧米では奇跡ですが）、削除するもっともな理由もあるかとは思いますが、原書（292 ページ）をそのまま訳したら 350 ～ 400 ページになって、誰も買って読まないで、二百数十ページにまで落としたいという出版社と翻訳者の意図があるようです。私は、ケーススタディだけでなく、他にも削除されている箇所がある可能性はかなり大きいと思っています。

（ちなみに、私が名著と捉えているエックハルト トールの『ザ パワー オブ ナウ』（邦題は『さとりをひらくと人生はシンプルで楽になる』）も、翻訳者によって、邦題、本文とも、同じような運命にあっていよう。）

以上が、この翻訳書では必ずしも原書のすごさは通じない可能性がある、と私が思う理由ですが、これらの誤訳については、非常に著名な方の翻訳書なので、できれば完璧な訳をしていただきたいと思う反面、「（仲間内用に）北岡さんに訳し直していただきたい」というご意見もいただきましたが、私は、最高で、もっともわかりやすい NLP の紹介本の『Magic of NLP』を翻訳出版したとき、市場から「難しい」という反応をもらって、正直度肝を抜きました。

私は、それ以来、翻訳には関わらないようにしていますし、私個人としては、一般の方々が「現実という名の RPG ゲーム」のノウハウを通じて、学校時代に学んですでに潜在的にもっている英語のノウハウを「実際に使って」、自分で原書を読んでいただきたいという思いでいっぱいになっています。理想的には、何年かかっても、自分で原書でと読むべきだと思いますが、少なくとも、アフメーションの部分の原書と翻訳書の突合くらいは自分ですべきです。

【4】 本田さんに対しては、好きな人も、嫌いな人もいる】

【5）「マネーゲーム」、「ビジネスゲーム」の名前から、この本は「純粹意識（神）」のことを書いているとは思えない】

シャイフェルトの本を私に紹介してくれた方（ワークショップ講師）は、「この本は、あまり売れていないが、とんでもない本だ。本の中でも示唆されているように、この本と縁がある人だけしか手に渡らないようになっている」という意味のことをおっしゃったのですが、翻訳の質の問題はさておき、さまざまな「罨」と「トリック」を通じて、彼の本（厳密には、原書にある本来の真髓）が本当に必要としている人の手にしか渡らないようになっているというのは、たしかに、その通りかもしれません。

なお、本書の「第二版」加筆の段階で、実は、ひょんなことから、ある方を通じて、本書を翻訳された本田健氏と直接お会いすることができる可能性が出てきています (!)。もしこれが実現したら、本書の翻訳に関する私自身の「僭越」な見解を同氏に直接お伝えさせていただくつもりでいます。

もし本田氏にお会いできた場合は、「第三版」で、その報告をさせていただきます。

②「ザ プロセス」概要解説

本節では、「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」(すなわち、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」)の概要解説をさせていただきます。

『マネーゲーム』では、「第一段階」(二元論の「現象界」のフェーズ)から「第二段階」(一元論の「純粹意識」(古今東西で、「絶対意識」、「神」、「空」、「ブラーマン」、「サムシンググレート」、「絶対(もしくは純粹)観照者」、「サットチットアーナンダ(絶対的存在/絶対的意識/絶対的至福)」等、数多くの言葉で形容されてきています)のフェーズ)に「戻る」ための4つのツールが紹介されていますが、私が特にすごいと思っているのは「ザ プロセス」と呼ばれているアフアメーション(マントラ)です。

(結局、「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論」(すなわち、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」)とは「ザ プロセス」のことです。以下、「ザ プロセス」の表現に統一させていただきます。)

【著者注：このエッセイの草稿を閲覧したある方から、「(「神の体験を創出できる認知論的な方法論」としての)『プロセス』は『ザ プロセス』の表記の方がいいのではないか」という指摘を受けました。

たしかに、日本語で、一般名詞の小文字の「process」と固有名詞の大文字の「Process」を区別したいと思っていましたし、特に、この「プロセス」をNLPの「プロセスとコンテンツ」の「プロセス」と混同される方も実際にいらっしやったので、「ザ プロセス」表記の方が誤解は少ないと思い、本バージョンでもこの表記を採用することにいたしました。】

「ザ プロセス」(あるいは『マネーゲーム』の本)は、量子力学とホログラフィー(ホログラフィーについては、シャイフェルトの二冊の本とマイケル タルボットの『ホログラフィック ユニバース』を参照してください)に影響を受けていて(この背景については次節で述べます)、著者のモデルによれば、リアル(現実)なものは「1) 純粹意識」と、「2) 場(フィールド)」と、場の上にある「3) パターン」と、純粹意識がパターンに送り込む「4) エネルギー」の4つだけで、そこから生み出される「現象界」は、無条件にすべて、「幻想」(サンスクリット語で「マヤ」)です。

シャインフェルトは、このモデルが絶対正しいとは言っていないで、欠点もたくさんあるだろうが、彼の知っているうちでもっともパワフルなモデルだ、という意味のことを言っています。北岡もそれに同意します。

結局、ホログラフィー的な幻想としての現象界がリアルに見えるのは、場にあるパターン（たとえば言うと、お金、銀行口座、預金通帳等）に縛られて、パターンに条件反射的にエネルギーを入れ続けているからだけであって、そのことによって、本来は無限であるはずの「本当の自分（純粹意識）」が幻想としての現象界に目を曇らされているだけなので、そのパターンからエネルギーを抜き取って、「本来の自分」に取り戻し続けることができれば、どんどん自分が純粹意識に近づいていく、というメカニズムが「ザ プロセス」の核心部分となっています。

アフメーション（マントラ）としての「ザ プロセス」は、「自分が純粹意識であることを認め、現象界が幻想であることを認め、その背後の純粹エネルギーに気づき、そのエネルギーを自分に取り戻し、本来の自分を表現して、純粹意識と現象界に感謝する」ことに還元されます（『マネーゲーム』と『ビジネスゲーム』では、アフメーションの内容が異なっていて（後者の方が簡略化されています）、また、著者も、読者自身のアフメーションを改良していけばいいと言っているのです、ここでは、私なりにアフメーションの要点をまとめてみました）。

以上が、アフメーションとしての「ザ プロセス」の概要ですが、私は、「ザ プロセス」は、量子力学、ホログラフィー等の最先端の研究を取り入れた、インド哲学の考え方ともいっさい矛盾しない、すばらしい「悟りのための方法論」（「神の体験を創出できる認知論的な方法論」）と見ています。

人間は、通常、ホログラフィー的な幻想としての（二元論の）現象界（シャインフェルトの言う「第一段階」）にどっぷりはまり、縛られています。元を辿れば、「本当の自分」は、場のパターンにエネルギーを吹き込んで、ホログラフィー的な幻想を自分で作り上げた「純粹意識」（神、空、ブラーマン、サムシンググレート、絶対意識、等。シャインフェルトの言う「第二段階」）そのものなので、「ザ プロセス」によって、「パターンを崩壊」させることを通じて、現実と思われていたのは、実は「マヤ」（「幻想」）でしかないことが腑に落ち、不純物がどんどん取り除かれるので、このアフメーションを唱える人は、誰でも、やがては、純粹意識に戻れる、と私は考えています（このためにこそ、私は、「ザ プロセス」

を「神の体験を創出できる認知論的な方法論」と形容してきているわけです)。

私は、メルマガ新編第 44 号で、(私にシャインフェルトのことを教えてくれた)「この講師は、最近、量子力学を徹底研究されてきているようで、その文脈で、『「純粋意識」(北岡は、「神(ブラーマン)」と等価と思っています)が自分を知るために主体と客体を分けた。その二元論の中で生きている人間は、「完璧なハリウッド映画」を見せられているが、すべて巧妙にトリックが隠されていて、絶対に、(現象界を超えた)その監督(純粋意識)の正体がわからないようになっている』という意味の、実に興味深い発言をされました」と述べましたが、この意味は、通常、五感では絶対認識できない「純粋意識」(NLP の「メタ ポジション」に相当する「純粋観照者」)に、「ザ プロセス」を通じて、戻っていける可能性が生まれた、ということです。

以上を背景として、メルマガ新編第 44 号の以下の部分を読んで(あるいは、読み直して)いただけたら、私の言わんとしている意味がよくわかるかと思います。

私は、常々、首尾一貫して、「NLP は、青空を覆っている雲を排除するための最高の方法論です」と言ってきています(今もそう思っています)が、その際、「雲を排除した後の青空は、各人それぞれ NLP 以外の方法で前もって磨いておいてください」というふうに言い足してきています。

言い換えれば、NLP では、構造的に、「アンカーの上書き(リプログラミング、プログラミング変更)」は可能ですが、「アンカーそのものを消滅させる(純粋意識になる、という意味では、ディプログラミング、プログラミング解除)」ことはできないはずで

私は、量子力学、ホログラフィー、フラクタル的なパラダイムに基づいている該当の本【注:『マネーゲーム』のことです】で提唱されている、一見普通に見えるアフメーションは、まさしく、この「雲を排除した後の青空を磨く」ための「プログラミング解除」の方法論だと見ています。

別の観点から言うと、NLP では、アンカーのショートカット先の体験を作れませんが(= レモンの味を味わったことのない人に、NLP でレモンの味を体験させることはできない)、この本の方法論を使えば、ア

ンカーで呼び出すべき「雲を排除した後の青空」(すなわち「神の体験」)を「創出」できると考えています。

以上の私の今の意見がもし仮に正しいとしたら、「人類」は、「神の体験を創出できる認知論的な方法論」と「一度体験した神の状態を、いつでも自由自在に再現できる方法論 (NLP)」の両輪を獲得したことになってしまいます (!)。

ここで、勘の鋭い読者の方は気づかれたかもしれないですが、つい最近の私の「現実という名の RPG ゲーム」の独自開発は、もちろんのこと、シャインフェルトの本と、次節でカバーするシャインフェルトが影響を受けている思索家たちの考え方に深く感銘を覚えた私が改めて再強化した「現実とは文字通り幻想 (仮想現実) でしかない」という確信に基づいて、なされたものです。

以上が、「ザ プロセス」についての概要解説ですが、二点、重要な追記があります。

一点目としては、私の個人セッションのあるクライアントの方は、「私は、(左脳的には) 現実はすべてマヤ (幻想) だということは知っています。ただ、日常生活で、その洞察が 24 時間続かないことが、私の最大の問題です。どうか、『一振り』すれば、日常生活のすべてが幻想として崩れ去るような『魔法の杖』を私にいただけませんか?」という意味のことをおっしゃいました。

私には、お金を儲けたい、最高のパフォーマンスを発揮したい、悟りを得たい、等、目的は異なれ、自己啓発系/成功哲学系の業界に方法論を求めて来られる方々は、ほぼ全員、このような思いをもって来られている、のだと思えます。

私は、この方には、「たいへん申し訳ないですが、本来的には、すべてはマヤで、ご自身は純粹意識『だった』のですが、子供のときに、自分の世界地図 (世界観、ボックス、前提) を作り上げたとき、ありとあらゆる試行錯誤をして、『これは現実だ』、『これも現実だ』というふうに、無数のプログラミング (思い込み、前提等のこと) のインストールを自分に対してしてきていて、それらのプログラミングが現在無意識化されてしまっていて、意識的に『気づいていない』だけです。ですので、『ザ プロセス』を通じて、地道に無数と思われる、しかしあくまでも有限数のパターンを崩壊させる必要があります。すべての自分の中にある『プログラミ

ング解除』に成功したときに、あなたは『魔法の杖』を獲得するはずです。その境地に至るまでは、自分の責任でインストールしたプログラミングを(他人は解除できないので!)自分で解除していただくだけの『地道な作業』だけは必要です。そのこと(=自己責任を果たす)もできないようであれば、この業界に来る権利がないと思いますが」と申し上げさせていただきました。

ちなみに、自分が生まれてから自分自身にインストールしてきた意識的、無意識的なプログラミングの解除については、通常は、無数のプログラミングがあると思うので、やる気をなくすのでしょうが、私は、上に「『ザプロセス』を通じて、地道に無数と思わる、しかしあくまでも有限数のパターンを崩壊させる必要があります」と書いたように、誕生時から、「人格」(NLP的には「後天的に獲得した行動/思考パターンの総計」と定義すべきですが)が形成されるだいたい4歳児の頃までに自分がインストールしたプログラミングをすべて解除する必要があるだけではないか、と思っています。

さらに言うと、このプログラミングの効果的な解除法がないので、通常は、「ほぼ無限の数」が存在すると思えていますが、北岡が独自開発した「現実という名のRPGゲーム」のノウハウを使えば、解除すべきプログラミングの数を「有限化」できるはずです。

二点目としては、自己啓発系/成功哲学系の業界に来られる方々は、通常は、シャインフェルトの言う「第一段階」(二元論の現象界)の、いわゆる目に見える結果(すなわち、シャインフェルトによれば、ホログラフィーとしての幻想内の結果)を得たいと思っている場合が多いと思いますが、シャインフェルトは、「第一段階」で何を得たとしても、結局は(幻想しか得られないので)けっして満足できないので、人間としては、「ザプロセス」によって「第一段階」から完全脱却して、「第二段階」(一元論の純粹意識)に「戻る」必要性を説いています。

ここに、文字通り他のすべての(「幻想しての」物質界の成功を求めている)自己啓発系のアフメーションが効果を発揮しない一方で、(「唯一現実である」神の体験を創出できる方法論である)「ザプロセス」の偉大さとそのアフメーションの効果性があります。

③ 「ザ プロセス」 背景解説

実は、私は、個人的には、『マネーゲーム』の著者であり「ザ プロセス」の開発者であるシャインフェルト自身よりも、そのメンターの匿名の B.W. 氏の方がとんでもない人ではないかと見ています。

シャインフェルトの VOICE 社からの新著の紹介動画を見てみましたが、あまりピンときませんでした。私の最近のあるイブニング ワーク中に、一人の参加者が「シャインフェルトは胡散臭いですね」と言われたので、私も同意しておきました (!)。

(ただし、とんでもない方法論である「ザ プロセス」を開発してしまった事実については、奇跡的で、私には、シャインフェルトに脱帽することしかできないですが。

私はメルマガ新編第 45 号で、シャインフェルトについて、「過去の私の修行時に体験した『悟りの世界 (純粹意識、とっていいです)』から照らし合わせてみて、この本の方法論のすごいところは、すでに『向こうの世界 (神の世界、靈界) に抜けた次元』 (『二元論の中で生きている人間に「完璧なハリウッド映画」を見せていて、絶対に正体がわからないようになっていく (現象界を超えた) 監督 (純粹意識) の次元』 のことです) から、まだその次元に抜けていない人々に手を『差し伸べている』点です。まさに、『慈悲に満ち満ちた「菩薩」的な人間愛的行為』かと思います」と書かせていただきましたが、このようなとんでもない方法論を世に出した「性善説」は、賞賛しても賞賛しきれない、と思いました。

シャインフェルトのこの「善行」に触発されて、私も、本エッセイにある情報を、現時点ではクロードの環境ですが、世の中に開示している次第です。)

ただ、B.W. 氏は只者ではないと、見ています。ある方は「奇跡のコース」関連の方なのでは、と私に言いましたが、私は、西洋魔術系の秘密結社の人では、とかつてに考えています。

ということなのですが、私は、通り一遍に自己啓発系のアフアメーション (マントラ) を唱えることなどに興味はない人なので、シャインフェルトを知った約半年前から、彼がすごいと言っている思索家、学者を原書で研究してきました。

その研究結果を、本エッセイで情報開示したいと思っています。

この情報開示は、学者と本の名前を出しても、「外野の評論家」の人々は、おそらくそれらの本を原書読むことはなく、たぶん **Wikipedia** 等の **Google** 検索による表面的な情報収集をすることで終わってしまうだけと予想でき、その形では、少なくとも私と同じ量の努力をしないかぎり、私のノウハウがその人々に盗まれることはない、という自信のもとで、行わさせていただきます。

まず、シャインフェルトの本に影響を与えた重要な思索家は、マイケル タルボットです (本エッセイでは、原則として、思索家の名前は日本語表記します)。

タルボットは、**1992** 年に **38** 歳で夭折した、まわりからアイコンのように見られていたゲイのジャーナリストです。

私は、タルボットは **6** 冊の本を残しています。私は、**2** 冊の小説を除いた、『ホログラフィック ユニバース』を含んだ重要書 **4** 冊のうち、「輪廻」関連の本を除いた **3** 冊を読みましたが、**3** 冊ともすばらしい本です。

特に、彼は、ポルターガイスト、サイコキネシス、テレキネシス、サイコメトリ、臨死体験、幽体離脱、未来予知、遠隔透視その他の「神秘的現象 (超常現象)」 (および、私の見るところ、「神の存在」も!) は、すべて、ホログラフィーと量子力学等の組み合わせの観点から「科学的に証明できる」という立場を取っている点が、極めて興味深いと思っています。

ただ、タルボットの **1991** 年刊の『ホログラフィック ユニバース』 (翻訳書は **1994** 年と **2005** 年刊) については、ネットによれば、「トンデモ本として葬り去られている」的な評価しか受けていないようです。また、翻訳書 (邦題は『投影された宇宙』) は難しい、と聞きました。

思うに、タルボットもそうですが、フリッツジョフ カプラ、ルーパート シェルドレイク、スタニスラフ グロフ等の「ニューサイエンス」系の本は、**80** 年代、**90** 年代に、故吉福伸逸氏等も関係しながら、工作舎その他から大量に出版されていたと記憶していますが、現在は、市場では「ニューサイエンス」の「ニュ」の字も語られなくなっているようで、「栄枯盛衰」の感があります。個人的には、極めて残念に思います。

(ちなみに、私は、NLP を学び始めた 1988 年前後に、英国で、カプラ、シェルドレイク、グロフ、それにケン ウィルバー等のニューサイエンス系の思索家は、ある程度以上研究済みでした。)

タルボット、カプラ、シェルドレイク、グロフは、日本では、過去の人で、今は誰も読まないのかもしれませんが、西洋では、これらの思索家が仮にもし過去の人であったとしても、その伝統を引き継いで、現代風にアレンジして、さらに人間意識の向上と進化に貢献している、それも一般の人々に読まれている思索家、学者がいますが (その代表的な人が、後で述べるガリー ラヒマンです)、日本では、この意味での「文化継承の完全なる断絶」があり、そのような日本人としての思索家は誰もいないように思われますし、仮にいたとしても、その本は国内市場ではまったく売れないと思われます。

言い換えれば、西洋では、タルボット、カプラ、シェルドレイク、グロフ、ラヒマン (全員、「現実とは仮想現実ではない」ことを主張しています) 等が一般の人々に読まれることで、「現実とは仮想現実ではない」というパラダイム シフトが徐々にであれ、社会全体にさらに広がっていったという事実がある反面、「携帯/ゲーム機」と「漫画」と「テレビ」に埋没して、本を読むという知的行為を放棄している日本人が「現実とは現実で、仮想現実で仮想現実である」という (デカルトとニュートンが確立した 400 年前の) パラダイムからいっさい抜け出せていないことは、たぶん国内の人々が懸念している以上に悲劇的で、極めて危険な状況かと思われま

す。

このことに関連して、興味深いことを発見しました。日本のビジネスの伝統の金言は「お客様は神様である」で、事実、西洋の、(1950 年代までかと思いますが)「教育的」な上からの押し付けの「広告手法」は限界性を迎え、それ以降は、日本風の「カスタマーは絶対正しい」という広告手法に変わってきていると言っても、間違いではないと思います。

ということで、日本も、西洋も、現代では、「お客さん主導」のマーケティングが主流になっているわけですが、ここで、一点、致命的な文化的差異があることを忘れてはいけないと思います。

すなわち、それは、日本のお客さんは自分の頭で考えない傾向にあり、西洋のお客さんは自分で考える傾向にある、という事実です。

このことについて、一点だけ例を挙げさせていただきます。以下は、メルマガ旧編第 258 号からの引用です。

おそらく、日本には、このような「無害」なダレン ブラウン【注：英国のメンタリスト】の動画はメディアで紹介されてきているかと思いますが、白昼堂々と通行人に瞬間催眠をかけて、財布や時計を奪い取る動画や、ガチンコで行った「ロシアンルーレット」の動画は紹介されていないと思います。

その中でも、私が「極めつけ」だと思ったのは、ある英国のお城で、表面的には自己啓発セミナーと名打って 13 名の参加者を募り、その泊まり込み講義の間に、参加者に対してありとあらゆるサブリミナルのメッセージとアンカーリングを埋め込むことでマインドコントロールして、最終的に女性一人を含む 4 名を選出して、セミナーが終わった後、後日、この 4 人を別々にロンドンの英国銀行の裏通りに呼び出して、偽の現金輸送車と偽のガードマンが守っている、本物の 20 万ポンドが入っているジェラルミンケースを「襲撃強奪」できるかどうかを確かめる実験をした TV 番組動画です。

驚くべきことに、この 4 人のうち、最後の男性一人を除いた 3 人は、人気のない裏通りを歩いていて、高揚感を引き出すアンカーがすでにかかっているジャクソン ファイブの曲を流すサクラの車が通り過ぎた後、現金輸送車と偽のガードマンを見た瞬間、予め持参するように指示されていたおもちゃのピストル【を】ポケットから取り出し、ガードマンを襲い、路上に平伏せた後、ジェラルミン ケースを奪って、一目散に逃げ出します（最後の一人だけは、現金輸送車と偽のガードマンに瞬間的に反応した後、何もせずに通りました）。

この場面の一部始終は複数の隠しカメラで撮影されていますが、「襲撃者」が現金をもって逃げ出した瞬間、隠れていたカメラクルーとダレン ブラウンの総勢二十人くらいが彼もしくは彼女を追って、取り押さえ、ブラウンがなだめ始め、状況を説明します。その後、テントにつれて行き、その中で、「元襲撃者」を催眠にかけて、脱マインド コントロールして、正常な精神状態に戻す、という「公開実験」の内容になっています。

この実験は、すべて、英国警察の同意と監視の元に行われていること自体が極めて興味深いことですが、思うに、誤解を恐れずに言うと、「痴漢はなく、ただ強姦だけがある」欧米では、とても日本のようなせいぜ

い「俺々詐欺」が見られるような生易しい状況ではなく、上述した、白昼堂々と通行人に瞬間催眠をかけて、財布や時計を奪い取る方法や、この一般人を現金輸送車襲撃者に仕立てあげ的方法（お城での「偽」セミナー中の洗脳方法には、明らかに NLP の手法が使われていますが、使われたすべての手法が番組内で紹介されているわけではありません）といった手法については、このような手法に騙されないように、というメッセージを番組視聴者に伝えているように思いますし、また、警察も、マインドコントロール法について情報収集したかったので、この番組制作者に協力したのだと思います。

すなわち、日本では、このような悪人の手口は絶対にメディアで公開されないはずですが（この動画は、もともとは英国で放映されたテレビ番組で、今でも DVD で普通に買えます）、官憲と犯罪者との「騙し騙されのイタチごっこ」状態の欧米では、裏の「禁じ手」さえも公開しないと、もはや自分の身を守れなくなっているということです。

この例は、西洋の「ダークサイド」として引用しましたが、いずれにしても、西洋では、たとえば、広告主も広告を見る一般人も、両方とも日夜頭を使って自分を守ることに専念していることは事実です。

この中での「お客さん主導」のマーケティングは、たぶん、素晴らしい結果を生み出すと思いますし、社会の進化にも貢献すると思いますが、個人的には、「思考停止状態」の人々が多い日本で「お客さん主導」のマーケティングをしてしまうと、携帯電話業界ですでに起こった「携帯電話のガラパゴス諸島化」に象徴される悲劇的な「文化的停滞状態」が引き起こされてしまうのでは、と私は考えています（すでにこのことが広く社会に起こっていると思いますが）。

私が最近独自開発した「現実という名の RPG ゲーム」は、そういう数多くの思考停止状態の日本人の方々が、「各選択点で、自分で臨機応変に考えて、自分で行動選択肢を選ぶ」ことを可能にする方法なので、上記の比較文化論的な観点から言っても、日本を根底から変える起爆剤になりえる、と考えているところです。

シャインフェルトの『マネーゲーム』の源泉として、タルボット以外にも、量子力学者のデイビッド ボーム、ホログラフィー研究者のカール プリブラム、少し異色の学者のバーバラ デューイ等がありますが、現在、私は、数多くの学者が尊敬の念をもっているように見受けられるボームを

徹底研究してみたいと思っているところです。ボームは、物理学と神秘主義の橋渡しをしています。

過去半年間の私の研究では、タルボットの『ホログラフィック ユニバース』の源泉として特に興味深かったのは、ジョン ブリッグ & デイビッド ピート著の『鏡の宇宙』です。ここでは、「ホログラフィーとしての宇宙」を提唱する学者として、アインシュタイン（彼は、たぶん、結局は、デカルト/ニュートンのパラダイムの枠組み内にいたのかもしれないが）、ボーム、「散逸構造」（この訳もわかりづらいですが）論者のイリヤ プリゴージン、シェルドレイク、プリブラムの 4 人の学者と理論を検証している、すばらしい本でした。

また、量子力学、ホログラフィーとは直接関係ないですが、ガリー ラヒマンの『隠された意識の歴史』は、見事な本でした。

ラヒマンは、ポップグループの「ブロンディ」（「銀河のアトミック」が有名な曲です）のベーシストだった米国人で、現在は、英国在住で、オカルト/精神世界系の本を多数出版しています。

私の見るところ、彼は、コリン ウィルソン（1956 年に『アウトサイダー』で衝撃的なデビューをした作家ですが、これも日本では過去の人ですかね）の路線を歩んでいるようです。

昨年、改めてユングに興味にもち始めたとき、たまたま、ラヒマンの『神秘家ユング』を読んで、深く感銘を受け、彼を研究し始めたのですが、それ以来、彼の本を数冊読んできています。私は、非常に重要な現代思索家と見ていますが、このご時世では、彼の本は、たぶん、国内では売れないので、一冊も翻訳されないと思います。

最近読んだ『隠された意識の歴史』では、ラヒマンは、R. M. バック、ウィリアム ジェームズ、ベルグソン、ニーチェ、シュタイナー、ウスペンスキー、マダム ブラヴァツキー、コリン ウィルソン、フンベルト マツラナ、アンドレアス マヴロマティス、ジュリジュ モスコヴィティン、ジャン ゲブセールその他の思索家、学者の理論を考察した上で、「人間意識の進化論」を提唱しています。

私自身、今まで名前を聞いたことのない思索家（特に最後の 3 人です）もいたのですが、この本に触発されて、この分野の研究を継続していきたいと思っているところです。

これが、メルマガ新編第 55 号で、「実は、この分野での本格的な『内的飛行士 (psychonaut)』としての私の研究はまだまだ始まったばかりなのです」と書いた背景です。

私の NLP の興味は、もともと、このラインの「意識の研究」の延長線上にあったのですが (NLP を学び始めた 1988 年前後、私は、シャンカラチャリヤ、グルジェフ、ウスペンスキー、ブラヴァツキー、カプラ、シエルドレイク、グロフ、ウィルバー等を本格的に研究していました)、国内の、自己啓発系、成功哲学系に偏った NLP 研究者とは、「水と油の関係」にあった、と言っても言い過ぎではないかもしれません。

いずれにしても、私の最近の研究を通じて、現代において、西洋では、400 年前のデカルト/ニュートンの還元主義のパラダイムは完全に崩壊していて、ボーム的な「空間と時間は幻想である」という「非局所論」が主流を占めていることを再確認することになりましたが、このことが、直接的、間接的に、最近の私の「現実という名の RPG ゲーム」のノウハウの独自開発につながった、というわけです。

結論としましては、私は、現在、主に、量子力学、ホログラフィー、および、ラヒマンの『隠された意識の歴史』の「人間意識の進化論」に基づいて、シャインフェルトの「ザ プロセス」は、真に「神の体験を創出できる認知論的な方法論」であると思っています。

ただ、私は、何ごとに対しても、「熱狂的／盲目的信者」ではなく、「徹底的懐疑主義者」であり、かつ、「実際の現場での『仮説／実行／検証サイクル』の継続的实践者」なので、将来ある時点で、「ザ プロセス」以上のものが見つかるか、あるいは、私の中で、量子力学、ホログラフィー、ラヒマンの人間意識の進化論が実はナンセンスであることが判明した時点で、「ザ プロセス」を完全否定していくことになります。

ですので、本エッセイに書かれていることは、現状の私の世界地図の中でもっとも適切だと思い、最高の考えであると見なされているモデルを提唱しているだけです (それにしても、「ザ プロセス」を知って以来、シャインフェルトを含め、度肝を抜かれることを提唱している人々に出会ってきていますが)。

④ NLP と「ザ プロセス」の完全止揚統合

ということで、「ザ プロセス」の概要解説と背景説明をさせていただきましたが、本節では、NLP と「ザ プロセス」の「共通点」を考察して、その「止揚統合」を図りたいと思っています。

まず、私は、「現実という名の RPG ゲーム」モデルを独自開発する前までは、単に、「『人類』は、『神の体験を創出できる認知論的な方法論（「ザ プロセス」）』と『一度体験した神の状態を、いつでも自由自在に再現できる方法論（NLP）』の両輪を獲得した」と考えていただけで、方法論的に、この両輪がどう止揚統合されるのかは、思い当たりませんでした。

ただ、「現実という名の RPG ゲーム」モデルを独自開発した後、私は、「ザ プロセス」も NLP も同じメカニズムに基づいていることを発見してしまいました (!)。

NLP のメカニズムについては、メルマガ新編第 53 号で、「選択点」について、以下のように述べさせていただきました。

結論としては、選択点において、意識的も無意識的にも、選択肢がなければ、「世界／現実はいっさい変わらない」と思うのはしごく当たり前であって、いわゆる「現象界」から「向こうの世界」に出て、「メタ（観察者）の視点」から現象界に「選択点」を置いて、ある意味、そこに強引に新たな行動選択肢を挿入するメカニズムは、「とんでもない奇跡的な神の偉業」であるとしか言わざるをえないと思います。

一方で、「ザ プロセス」のメカニズムは、「1) 純粹意識」と、「2) 場（フィールド）」と、場の上にある「3) パターン」と、純粹意識がパターンに送り込む「4) エネルギー」から成り立っていますが、両者には、以下の完全対応があることがわかりました。

「ザ プロセス」	NLP
純粹意識	メタ（純粹観照者）
場（フィールド）	演習の仮想現実の場
パターン	選択点
エネルギー	メタからの観察と介入

私は、個人的には、これだけの対応があるのは、けっして偶然ではない、と考えています。

一つの解釈としては、シャインフェルト (もしくは、B.W. 氏) が NLP を徹底的モデリングして、この「ザ プロセス」のメカニズムを考案した可能性があります。

いずれにしても、これだけかけ離れた二つの分野 (NLP の共同創始者のジョン グリンダー氏は、「完全不可知論者」で、我々の外界には神がいるのかいないのか、いっさいコメントが不可能である、コメントできるのは「世界地図」としての主観的体験だけだ、という認識論的立場を取っていますし、また、NLP の方法論自体が、ワトソン、スキナー式の行動心理学から派生している (もちろん、行動心理学者は人間の意識を完全否定するという愚行を犯しましたが、NLP はその意識としての主観的経験だけを研究するという決定的な違いがあることは言わずもがなですが) 一方で、「ザ プロセス」は、「純粹意識 (神、空、ブラーマン、サムシンググレート、絶対意識、等)」の存在を前提することから始まっています) が、まったく同じメカニズムの方法論に基づいている事実は、驚異的です。

ただ、もちろん、「ザ プロセス」と NLP には、決定的な違いが一つだけあります (なければ、相互の亜流の方法論にしかなりえません)。

その違いは、「ザ プロセス」は、「場 (現象界を生み出すもとの、無限の可能性のフィールドのことです) のパターン」からエネルギーを抜き取ることによって、「プログラミング解除」している一方で、NLP は、「演習の仮想現実の場の選択点」で、メタの立場から、代替選択肢を作り、その選択点に挿入している、という意味では、「プログラミング変更」しているだけです。

この意味では、第一段階の最高の方法論が NLP であり、第二段階の最高の方法論が「ザ プロセス」である、とも言えるかと思います。

もちろん、この意味では、「ザ プロセス」が NLP を超えています。ただ、「ザ プロセス」のメカニズムをモデリングできるという意味では、NLP が「ザ プロセス」を超えていると、私は見えています。

このことは、たとえば、NLP 共同創始者のジョン グリンダー氏が指摘した「状態としては、催眠は NLP を超えているが、(特に、モデリングの) 方法論としては、NLP が催眠を超えている」というメカニズムと同じです。

「ザ プロセス」と NLP には、以上のような類似点と「補完関係」がありますが、もう一点、重要なこととして、半年前に「ザ プロセス」を知り、その後の量子力学とホログラフィーの私なりの研究に基づいて「現実という名の RPG ゲーム」のノウハウを独自開発し、さらに「ザ プロセス」と NLP の類似性にも気づいた後、実は、私は、完全不可知論者のグリンダー氏が開発した NLP で、すばらしい「二元論の止揚統合」（主に、ここでは「アンカー コラプス」を意味しています）ができるようになっていたが、「止揚統合の後残った一元論としてのパーツ」をどう処理するか、という問題があることに気づきました。

私自身は、これまで、「止揚統合の後残った一元論としてのパーツ」を「正」として、不快に思う「反」を見つけ、それらを「止揚統合」して、新たな「合」（すなわち、ワンレベル上の「正」）を作り続けていくことができれば、「般若心経の『掲諦掲諦 波羅掲諦 波羅僧掲諦』（『行って、行って、行きまくれ』）のような『永遠なる自己拡張』が可能となって」、「自分の人生はさらにさらにエキサイティングで、スリリングで、マーヴェラスなものになっていく」という立場を取ってきていましたが、以前、ある方との Ustream 対談（現在、この Ustream 動画は削除されていますが、有志の方が Youtube 化してくれています）で、その方から「そのような永遠の作業に疲れることはないのですか？」という意味の質問を受けました。このことは、メルマガ旧編第 159 号で、以下のように報告させていただいています。

第三弾 Ustream セッションで非常に興味深いことがもう一つ起こりました。

これは、私が「幸と不幸」（「正と反」、「ノーマインド」と「マインド」等）の止揚として「至福」（「合」、「メタマインド」等）があり、これによって、（般若心経の「掲諦掲諦 波羅掲諦 波羅僧掲諦」（「行って、行って、行きまくれ」）のような）「永遠なる自己拡張」が可能となる、と示唆したときに、インタビューアの【方】が、「たとえ止揚があり合に行っても、また同じように合が正となり、反と止揚されるので、同じことが永遠に続くことになりませんか？」（意味合いは、このプロセスはしんどい、つまらないことはないですか？ というものだったと理解しています）という質問をされました。

これに対して、私は、「止揚された後、合として何（どういう自己）が生まれるかは、その次元より低い次元の正または反が予め表出することは不可能で、もし仮に低い次元の自己が止揚された後の自己がどういうものになるかについて期待できたとしても、実際に止揚された後の自己

はほぼ常にその期待を裏切ります。その意味で、常に新しい自己の発見があるので、エキサイティングでかありません」という意味のことを発言させていただきました。

(私のこの論点は、左脳的議論に基づいているのではなく、今回の合宿ワークでも紹介された、この「正 + 反 → 合」の永遠なる自己拡張のプロセスを「実際に可能にする」意識的演習と無意識／催眠的演習の二つのテクニックを通じた、私自身の右脳的、体感的な経験に基づいています。)

この発言後、今一度振り返ってみると、正と反の二元論の永遠なる「水平的反復」の中には、「同じコンテンツの繰り返し」が関与しているように見える一方で、合への止揚の中には、「同じプロセスの繰り返し」が関与しつつ、コンテンツ (すなわち、自己がどのように変わるか) は、毎回毎回新しいものになる、と言えらると思えます。

さらに、止揚された後の合に進めない、進もうとしない、ことの裏には、もしかしたら、上述のように、「二元論の中を行き来する『サムサーラ (輪廻転生)』に飽き飽きして『至福』に抜きたい」と思うまでの「絶望の境地」にまだ達していないという背景が隠されているのかもしれない、と思えました。

以上、私にはきわめて興味深い (哲学的) 考察となりました。

以上のことについてですが、現在、ふと思いついたことは、インタビューアの方は仏教の「空」に興味があった方なので、この方の質問の意図は、「なぜ『空』、『無』に直接戻らず、『サムサーラ (俗世、現象界)』にこだわるのか」ということだったのではないか、ということです。

もしこれがインタビューアの真意であったとしたら、と考えたとき、「ザ プロセス」を知り、「現実という名の RPG ゲーム」を独自開発した「後」の現在の私は、本エッセイを執筆中に、ふと、以下の三点の非常に重要な洞察に至りました。

1) 通常、NLP の (あくまでも純粹観照者に近づく訓練ツールでしかない) 「メタポジション (観照者)」において、肉体をもった演習実践者が肉体を超えた純粹観照者になることはできませんが、「ザ プロセス」で「より純粹な意識」を作った後に NLP のメタポジションに入れば、さらに高質なワークが達成できると思われまます。

2) さらに重要なこととして、もしかしたら、NLP という「最高の俗世の方法論」で止揚統合したものを「ザ プロセス」で直接、「純粹意識 (空)」に戻して、「無限の可能性の場」の中に解消 (あるいは昇華) し続けることができれば、誰でも日常生活で後戻りしない「悟り」の状態を継続し続けることができるのではないかと思います。

(ちなみに、トランスパーソナル心理学者のケン ウィルバーは、「パーソナル (『個』、二元論の現象界の世界)」にいる精神世界系の人々が瞑想等を通じて「トランスパーソナル (『超個』、非二元論の神の世界)」に向かおうとして、実際は「プリパーソナル (『前個』、一元論の『前現象界』の世界)」に退化するという誤謬を犯しているケースが多い、と指摘していますが、上記のように、NLP という「最高の俗世の方法論」で現象界の二元論を一元論に止揚統合したものを「ザ プロセス」で、「直接無限の可能性の場」の中に解消 (昇華) し続けることができれば、この誤謬を犯すことはなくなると思われます。)

3) この二つの局面は、サイクルとして永遠に続けることが可能だと思われれます。私の以前の「正反合」の「永遠なる自己拡張」モデルはあくまでも現象界での「サイクル反復」でしたが、この NLP と「ザ プロセス」の間のサイクルは、現象界と純粹意識との間の「反復サイクル」になります。また、この NLP と「ザ プロセス」の間の反復サイクルは、「『現実』は瞬間瞬間に新たに生まれて、次の瞬間に『無 (無限の可能性の場)』の中に消えていく」という般若心経や新パラダイム提唱者の主張等を適切に反映したものとなります。

以上の文字通り「空恐ろしい」私の新しい洞察 (これらの洞察からいったい何が生まれてくるかは、今後の私の「意識の実験」で判明していきます) をここで報告することで、このエッセイの筆を置きたいと思います。

本エッセイを読んでいただいたことに心から感謝いたします。「ナマステ」。

編集後記: 本エッセイのこの書き下ろしバージョンは、執筆時間の制限もありましたので、シャインフェルトの本からの引用箇所を翻訳と完全照合しないまま、暫定的に公開しています。よって、本エッセイの引用文と翻訳の文章との間に齟齬がある可能性があります。

今後、推敲/編集を続けますので、将来のバージョンと本「ベータ バージョン」に差異が発生することを事前にご了承ください。